odai

magazine

#13

南米ペルー　ワスカラン国立公園トレッキング

様 式美

退職休暇を使って南米ペルーのワスカラン国立公園にトレッキング（一部ガチ登山）に行ってきた。

トレッキング2日目の宿は、標高４６８０メートルのRefugio Peru（ペルー小屋）に宿泊。標高がとにかく高いので、高度順応に日数を費やしてきたとはいえ、やはり頭痛が発生する。意識的に深呼吸を繰り返すことで、脳内に酸素を送り込み、なんとかやり過ごす。

そして翌3日目は標高 ４９００メートルのピスコ峰のハイキャンプまで登り、そこで仮眠を取り、夜11時に起床、夜12時の深夜にガチ登山開始！

標高５０００メートルの氷河末端に到着すると、ヘルメット、アイゼン、ピッケル、ザイル、等、いわゆる冬山登山装備を装着し、ガイドのエクタ(38)と2人3脚で氷河を登攀開始。アイスクライミングどころか日本国内での冬山登山すら未経験なのに、深夜の標高５０００メートルでアイスクライミングって、どう考えてもリスクがあり過ぎて心拍数あがりまくって、パニック気味。しかも周囲はクレバスだらけ。

もうここでギブアップして登山を終了したくなったが、ガイドのエクタが、『俺はプロのガイドだ。俺を信頼しろ！俺の言う通りに行動すれば安全だ。もし俺を信頼できないのなら、ここで俺達の登山は終了だ、今から街に戻ることになるぞ』と、満天の星空の下、ヘッドランプに照らされた顔を向けて、映画のワンシーンのように語りかけてきた。

「ＩＴＲＵＳＴＹＯＵ！」

と貧弱な英語ボキャブラリーでエクタに返答し、俺たちの深夜のアイスクライミングが始まった。

そしてクレバス地帯を命からがら脱出し、氷河をひたすら登ること4時間あまり、遂に、ピスコ峰のコル、標高５３００メートルまで到達。

東の空がうっすらと明るくなる。夜明けだ。

とまぁ、こんな感じで5日間の非日常体験（高所登山）を南米で満喫。そして日本に帰国後、18年間つとめた会社を6月30日をもって退職。

そして、7月1日次の新たなキャリアへの挑戦がはじまった。

ブラックホールは無色の星

おりいかえで

「ブラックホールって何？」
この問いかけをするとほとんどの人がこういう答えをを思い浮かべるのではないだろうか。
「黒い穴」
もしくは
「抜け出せない穴」
別にその認識は間違ってはいない。だだ、合っているとも言い難い。
今回はみんな名前は知っているが、その本質は知らないブラックホールの話をしようと思う。
ブラックホールは星が死ぬ時にできる。
そう、太陽のような自ら光っている星。恒星。
恒星は死ぬ時にものごっつい爆発を起こす。
その時、トルマンオッペンハイマーヴォルコフ限界（ブラックホールになるかどうかの質量限界のこと、生きていく上で全然覚えなくていい言葉）を超える星はブラックホールになる。
自分の重力に耐えかね、重力が無限大になるそうだ。
そして重力は空間を歪める。
無限大の重力のブラックホールは空間を歪めに歪め、そして、その空間にまるで穴が空いているように、落ちたものを二度と元の空間に戻せなくする。
それが空間的に見るブラックホール。
正直、これを聞いても「はぁ？」だと思う。
簡単に、わかりやすく言うと、ブラックホールも重力がえげつないだけで、一つの星なのである。

そう、光も吸い込む、丸い星。
そもそも、光が跳ね返るから色も見える。
しかし、見ることができない。
だが、そこにたしかに存在する。
超重力の星。
それがブラックホール。
見ること、観測することができないので人間には証明ができない。本来、思い浮かびもしない存在。しかし、１００年前にすでにその存在を示唆するものがいた。
そう、アインシュタインだ。
彼はブラックホールの存在を１００年前の科学力、１００年前の科学理論ですでに確信していた。
そして、皆様もご存知の通り。
今年、重力波が観測された。
それは、ブラックホールとブラックホールがぶつかった時に生まれる空間の波。
それが１００年越しに観測された。
アインシュタインは１００年越しに、自分の正しさを世界に知らしめたのだ。
かっこよすぎるのだ。
アインシュタイン。
生きていたら、もっともっとこの星の科学力に貢献していただろう。
彼の魅力は宇宙や物理学好きにはまさにブラックホールそのものである。
あの、抜け出せない的な。それである。
ちなみにブラックホールに死なずに吸い込まれた場合、宇宙の終わりを見ることができると言われている。
これは、説明が長くなるので、また次の機会に…。

橋の下の灯火

現代美術家　**泰平**

橋について考えているとある記憶がよみがえった。きっとあの橋の近くに住んでいた頃なので小学校の頃か。もしかすると中学の頃に引っ越した先からわざわざ行ったのかもしれない。

ある日、親と大喧嘩をして家出をした。とはいえ、行く宛てがあるわけでもなく、そんなにお金もなかったのだろう。しばらく近所を歩きまわり、夜中が近づいた頃にコンビニで立ち読みをしていたら、同い年か少し上くらいの男に話しかけられた。

「家出？」

「うん、お前も？」

「うん」

という感じで、まるで昔からの知り合いであるかのごとく自然と話を始め、仲良くなった。家出と気づかれた理由も、名前さえも結局最後まで聞かなかったので、具体的な記憶が殆ど無く、すべて未だに淡いシルエットだけの思い出である。家出にロマンを求めていたのかもしれない。もしくは、単純に不安だったのかもしれない。このまま家出を続ける不安、もしくは帰って親に叱られる不安、そして、その男との出会いを台無しにする不安。色んな感情が情報交換を最小限にとどめた。

「どこか行く？」

「うん」

二人でお金を出し合ってＺＩＰＰＯオイルと食べ物を買ってあの橋の方に向かった。

小さな港町の端にある、船がたくさん見える小さな橋の下。そこは過去に何度か家出した時に寝た場所で、安全かつ誰にも邪魔されないお気に入りの場所だった。その男はその場所をあたかも知っていたかのようについてきた。携帯も、ポケベルすらない時代、親が心配しているかもわからない。生ぬるい空気の中、ＺＩＰＰＯオイルで木くずを燃やしたりして、一緒に朝まで話しをした。

朝になると自然と家に帰ろうという話になり、それ以来、その男とは会っていない。自分の人生に起きた謎な出来事の一つである。

さて、あれは何だったのだろう。人と人との橋渡し、という表現があるが、橋渡しの必要がない自分たちにとって心地よかったあの橋の下。橋渡しをたくさんするようになった今も、その影にあるだろう閉ざされた場所に不思議な魅力を感じてしまうのはここだけの話である。

トリミング

栗原　論

盆踊りましょう

盆踊りが好きです。盆踊りで踊ることが好きです。雰囲気も好きです。

夏が近づくとふと思い出したようにいい盆踊りはないかと情報をチェックします。

このところ好きな盆踊りはフェスティバル福島の盆踊りです。あまちゃんの音楽で踊ったりします。「あまちゃん、楽しかったなぁ。」とか思いながら踊ります。

この盆踊りは、遠藤友絵さんが歌う「新生相馬盆唄」が非常にいいのです。歌声がいいのです。だからいつも行きます。

それ以外にもみんなで輪になったりとか、日比谷公園の銀座カンカン娘もほんとうは多分そうやって手を繋いだりする仕組みなんだけど、誰も手を繋いだりしないもんで。フェスティバル福島の盆踊りのことを「あまちゃん盆踊り」と言い続けますが、「盆踊りってどんなだろう。」とか興味を持ち始めてる人はあまちゃん 盆踊りに行ってみるといいと思います。振付もその場で解説あるのでやりやすいです。

盆踊りなんてのは知らない曲でも輪に入って2周くらいすればだいたい覚えられるから踊り分からないからと言って踊らないのはもったいないです。

例えるなら、「デレデッデ～、デッ、デッ、ＪＩＮＲＯ！」ってやるののちょっと長いバージョンです。

色々行ってみて自分に合った曲を見つけて、「選曲いいな」とか感じるようになれたらもう盆踊り好きです。

おだいにまつわるエトセトラ

小台って結局どんなところなんだろう。
自分ひとりの目では拾いきれないと思い、小台に訪れたことのある方にツイート感覚で小台について文章を戴きました。
まだ小台を訪れたことのない方の小台探訪計画の一助となるかもしれません。

こちらに越してきて3年、ぐるぐると橋の中、はじめて訪れた小台には東京の片隅のぎゅっとした生活感があり、飾った街中を歩くより東京を強くおみまいされた気がした、よそ者のわたし。小台、足立区民に聞いてもイントネーションが2通り。よそ者が小台を語るにはまずそこから。小台って早く言いたい。

みほ

どうにも端っこが気になる質だ。ルーマニアを訪れたらモルドバが。モルドバを訪れたら沿ドニエストル共和国が。という具合に。足立区に越してきてからも、あちらこちらと足を運んでいる。小台は現住居から、遠すぎず近すぎずちょうどいい塩梅の端っこである。といいつつ、近頃は新田も気になっている。

ＤＪ半額

川の向こう側の先では、と、川を見ながら日暮れに歌った。このあとブリュッケに行く。歌ってなんだろう、ちょうど遊園の営業が終わるのか、背中からアナウンスと音楽が流れて、同時にむこうから気のせいか、別の音が同じ音量でやってきて、川の真ん中でうわんと反響した。変なところだなあと思いました。

神田さやか

生まれ育った町。高校に入ってからは生活は小台橋が始点に変わって時間が止まった。時折、思い出と一緒に中を散策すると知らないものや知ってるものがあって、知ってるものはなくなったりする。こないだ、夜に出歩くと猫がいっぱいいて驚いた。

杉浦俊介

どこから行っても遠い街。僕が知る小台はまさにそんな場所です。夏の夜明け前、いくらか涼しくて老人か夜明かしの学生ばかりが起きているような時間帯に、川を渡り、朝露の土手を越えたら、そこに小台はいつもあります。ひっそりと、何か始まるような何も起こらないような。小台はそういうところです。

長谷川至洋

東京に住みだしてもう20年近くになるけれども、行ったことのない場所が沢山ある。小台にもBRÜCKEがあったから初めて訪れる機会ができた。誰かのホームタウンにお邪魔する感覚。2本の川の間。演奏しに行って、コーヒーを飲んだら美味しくて、どうやら小台にご縁があったようで。

みんみん

川が近くてとてもいい。草野球死ぬ程観たい。

柴田聡子

小台といえば、夕焼け。これがすこぶるいい。それに限っては、荒川より隅田川が、うんといい。あの時間、小台橋の真ん中に立って、ぼーっとしたい。そんなようなことを、たまに同僚に話している。

森山聡平

小台、夕方のまち。
あのペタンとした川が流れる橋から見える遊園地とスカイツリー、未来の裏側がある、そして夕暮れ。
ペタンとしたまちまた行きます。

かいてつろう

小台は最近初めて行きました。都電を降りるとしみったれた雰囲気に包まれていて、タバコ屋さんとか定食屋さんとかそういうのが目に付きます。すれ違うチャリに乗ったにいちゃんに聞き取れない罵声を浴びせられながら進むと、絵に描いたような体育教師が校門の前に仁王立ちしている高校がありました。なんか悪いことばかり書いてる気もしますが、これも一つのリアリティなんだなと感じます。きっと、都会、地方っていう大きな二つのくくりだけではなくて、都会の中に小さな地方があったり、元都会、現ちょいくたびれ都市、みたいなところが東京だけでもたくさんあるのだと思います。そこには生っぽいリアリティがあってそれをなんて呼んだら良いのかわからないんですが、僕はそれをファンキーと呼ぶことにしようと思います。

鈴木秀尚

「自分は昔から、倉庫やタワマンが建ち並ぶ臨海地域独特の茫漠とした雰囲気に妙に惹かれて来ました（理由は不明）。橋と幹線道路に囲まれた小台には、内陸部な のに明らかにあの空気がある。それでいて臨海部には無い人々の暖かな生活文化も感じられる。この両立が本当に魅力的です。

伊東謙介

小台にはたった一度だけしか訪れたことがなく、しかもそれも2年くらい前で、もうほんとに記憶からほぼ全て消去されているのですが、頑張ってその時のことを 思い返してみたところ、東京の東の方だし、わたしの生まれ育った地区（墨田区の八広）とだいたいおんなじようなものだろうと思ってたら、なんかけっこう違くて、八広はグシャッとした感じで、小台はカラッとしてる感じ、だったような。あと小台といえばの名店ブリュッケの店主は雑魚そうにみえてグイグイ系。

アゼガミチハル

池袋から巣鴨抜け　飛鳥の山のだらだら坂をペダル漕ぎつつ
汗まみれ　線路見下ろし　王子に着いて　ちょいと休んで気を取り直し　マンモス団地を通り過ぎ　工場並ぶ土手の道　緑色した鉄の橋　渡って飲むのよ　冷たいビール

小林タカキヨ

小台正確には足立区宮城の真上は、自分の最も好きな場所のひとつである。首都高中央環状線上り、江北ジャクションを池袋方面に入ってすぐの荒川に架かる五色桜大橋から眼下に広がる東京の灯は思いがけず美しい。

南勇介

ＯＤＡＩはやはり一発で変換して小台と出てくるまでに私も時間を要しました。ですが今はなんの苦労も無く変換できるようになりました。これもブリュッケさんで購入した豆をひいてアイスコーヒーにして飲んで冴えた集中力で仕事の効率があがったという声に繋がっているなと思いました。アイスコーヒー。

滝沢朋恵

橋のあれこれ

BRÜCKEは便宜上ブリュッケと読みます。ドイツ語で「橋」の意味です。

この名前はドイツ表現主義集団からとっているわけではなく、単に橋を意味する単語でドイツ語の字面や響きがよかったからこれになりました。荒川と隅田川に挟まれたコーヒーの店です。辺鄙なので気軽さがないかもしれませんが、気軽に立ち寄って頂けたらと思います。

ときどき催しをしています。「偶然に知らない世界に触れる」をモットーに店の半分で催し、もう半分は通常営業というストリート感を演出します。

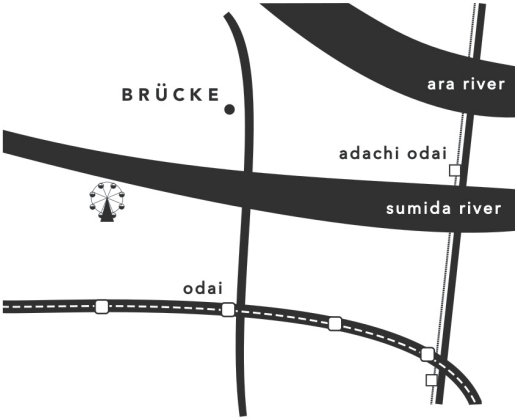
コーヒーをきっかけに何かが始まるといいですね。

9月18日から10月2日の期間に神楽岡久美さんの展示があります。詳細は隣のページをご覧ください。

その他、ライブや語る催しなどありますので詳しくはHPをご覧ください。

店ではコーヒーについて話をすることはないのですが、高円寺のコクテイル書房で月に一度「世界コーヒー散歩」という企画をやらせて頂いてます。コーヒーの産地に思いを馳せながらその辺の話をします。ご興味がありましたら時折覗いてみてください。

東京都足立区小台2-17-11
odaibrucke.org



9月の展示企画について

光を摘む　―光の記録―

光は万物に反射し、私たちの瞳をうつ。それは目に見えない速さで、鮮明な視界を広げている。

「見る」ということを「反射する光の粒を瞬時に摘み、それを束にし、確かな情報として記憶にとどめている。」としたとき、視力という身体能力は、システマチックでスピーディーだが、私は自分の意思で光を摘み、束ねてみたいと思った。そこにどんな世界を見ることができるだろう。

制作のコンセプトは世界と身体が対話することで生まれる発見や新たな世界の見方、展開を提案することです。そして9月に行う展示では去年制作した作品「光を摘む」を用いて撮影した光の記録、写真作品の展示となります。

これは、まぶたを開けば飛び込んでくる視覚情報から無意識に感じていたストレスや疑義とのおりあいをつけるだけでなく、日常では形として見えていない光を自分の意思で採取することで見えてくる新たな視覚情報を提案します。

PROFILE

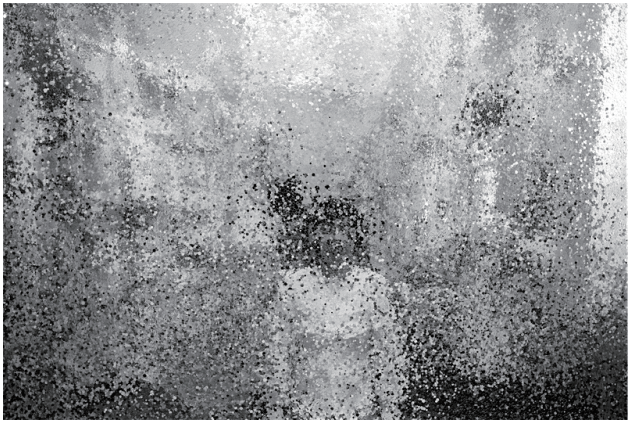
神楽岡　久美

東京出身。武蔵野美術大学院　修了

15年「SICF16」グランプリ受賞

12年　武蔵野美術大学院　卒業制作優秀賞受賞

HP　http://www.kumi-kaguraoka.com



足立区小台とはとくに関わりのない七月の俳句

七夕や若く愚かに嗅ぎあへる

七夕は旧暦の七月七日であり、秋の季語なので、七月の俳句として採りあげるのは不適切かもしれない。
ただ、八月とするのも現代の感覚からすると不自然に思われるため、今回採りあげることにした。

バーナード・スレイドの戯曲「セイムタイム・ネクストイヤー」は、それぞれに家庭を持つ男女が、年に一度同じ日、同じ場所で逢瀬を楽しむというストーリーである。私は高校生の頃に一度観たが、恋愛経験がなかったせいか、その面白さはよくわからなかった。

上記の物語は七夕の、よく知られた牽牛織女の物語と似ているが、私の印象はまったく異なっている。
不倫であるとか、西洋の話であるとかいうことは重要ではなく「セイムタイム～」の人物が演劇の登場人物とは言え「人」であるのに対し、牽牛・織女は「星」であるという違いが大きい。
「人」である以上、「セイムタイム～」の二人は舞台上に圧縮された二十五年の間に成長し、成熟し、老いてゆく。

一方「星」すなわち星座は、星空を舞台に一晩に一回ずつ同じ物語を繰り返す。
牽牛織女の場合は年に一度という特殊さが悲劇性と美の源なのであるが、永遠に老いることのない存在であることに相違ない。

掲句で「若く愚かに嗅ぎあ」うのは、人間の男女であろう。
互いに嗅ぎあうのは獣のような行為ではあるが、獣そのものだとすると「愚かに」という措辞はふさわしくない。
嗅覚という、動物的、生理的な感覚に基づく性愛に耽溺することができるのは若く、愚かであるからこそ。
それを老いてすぐに喪ってしまう「人」と、永遠に繰り返さねばならない「星」と。
それぞれの悲劇を一句のうちにするどく対立させ、哀愁と官能をない交ぜにした美を構築した。

（中村　安伸）

作者は高山れおな（１９６８年7月7日ー　）

ブリュッケまで

斉藤　友秋

我が家からゆっくり歩いて8分、小平駅は階段を登って降りてホームである。

西武新宿線、新宿方面に30分弱、高田馬場で山手線に乗り換える。

池袋を越えるとなると、脳裏に「旅」の文字が薄ら浮かび上がる。巣鴨という響きと存在に小さく翻弄され、田端駅を慌てて降りる。天候、または時間の制限によっては、バスの世話になるが、大抵は北に向かって足で歩く。

土地の高低を強引に繋げた人工的な坂を一息に駆け下り、交通量の少ない道路の信号を無視し、道なり、交差点に差し掛かる手前にあるコンビニで水を金で買う。

北に向かって信号を渡ると、それからはひたすら北へ、歪な道をそのまま進む。

なにも見る価値のない街など存在しない。価値は定められてはいないのだ。

都営荒川線小台駅。東西を結ぶレールを、二度目からは聖なる分岐点として実感するだろう。

水の気配からか、ビーチの空気を微かに感じつつ更に北へ。小さな坂の先に巨大な橋が現れる。

左には荒川遊園、河のイメージより広い川幅のせいか距離感が掴めない。

傾いたような下り、あとは目をつむっていても車に轢かれさえしなければ辿りつける橋、ブリュッケ。

わたしは小台

永田　壮一郎

新しい朝はなぜこんなに何もないのだろう。
日雇いの人夫が無表情で酒をあおる。
短い髪が気になって気になって学校に行きたくない。
「明日のことを考えると陰鬱な気持ちになる」
と嬉しそうに笑う河川敷の葦たちは
どこか遠くにつながるクモの巣を高架下から煮て。
川面の光をいなしている。
朝

Topics

八ヶ岳の山小屋でバイトしていた夏。朝食が一段落つくと、たまさんと「あまちゃん」を見ていた。休憩時間はすーさんたちと適当な時間を過ごしたり、山にきのこ狩りにでかけた。夜になるとDropboxに入れておいたこれまでの話を後追いして見ていた。

そんな能年さんが新しい名前で活動を再開するとなれば嬉しい限りでございます。

ブラジルでオリンピックが開催されます。昔からオリンピックというと、みんな見てるから半強制的に見てたり、そもそもあんまり起きてる時間にやってないし、今でもあまり興味はないけど体操だけは楽しい。

ファミコンでハイパーオリンピックというソフトがあった。クレー射撃がお気に入りだったけど、クレー射撃の中継とか見たことがない。

例年通り江ノ島に行った。早起きして行くつもりが予定より2時間も遅くなった。鎌倉から歩くのはよして普段乗らない江ノ電に乗る。これはこれで新鮮。江ノ島へも４００円のボートで一気に裏側に。新鮮。入場料高かったけど水族館にも行った。水族館を出るとすぐ砂浜に出られたから1分程泳いだ。乾かないから帰りの電車は座れなかった。

おだいのわたし（12）

小台湯

中村　安伸

四月末に営業終了となった小台湯の跡地を通りかかると、建物はすべて取り壊され、片付けも済んだ更地に巨大な煙突だけが残されていた。

コンクリートの煙突は異様に高く、真っ黒な鉄の輪を巻き付けた細長い姿には凶暴な印象すらある。

近隣の住居に煤や煙を浴びせることのないように、これだけの高さを必要としたのだろう。しかし、周囲のマンションにはこの煙突をはるかに越える高さのものも多い。

そして、取り払われてしまった、銭湯独特の寺社のような大仰な建築は、この禍々しい煙突の印象を中和させるためのものだったと合点がいった。

二年前小台に越してきたとき、給湯器に不具合があって一度だけこの小台湯を利用したことがある。

男湯の客は私以外みな互いに顔見知りの様子で、日常生活の一部としてこの湯を用いているようであった。

小台湯が閉鎖されたことで、情緒的な面はさておき、日常生活に著しい影響を受けたのは小台・宮城地域で風呂なしアパートに住む人たち、およびその大家にあたる人たちに限られており、多くのマンションや戸建ての住人たちに直接の影響はないかのように見える。

しかし、私が経験したような給湯器の故障など、セーフティネットとしての銭湯が必要となるような事案が、いつ、どこで発生しないとも限らないのである。

ここ小台・宮城においては手遅れとなってしまったが、近隣に銭湯が存在している方には、セーフティーネットを喪わぬためにも、定期的に銭湯を利用してみることをお奨めしたい。

二十年ほど前、毎日通っていた銭湯の湯はとても熱く、当初は水をかぶってからでないと入ることができなかった。

しかし、その湯で芯まで温めたからだは、真冬の夜でも簡単には冷めず、ぐっすりと眠ることができた。

このような記憶をたどっていくと、無性に銭湯に入りたくなってしまうのだが……。

１２８段の階段の歌
９段目

長谷川　至洋

冬は時折、雪が降る。これは雪になりそうだという感覚にはどこか心休まるものがあって、僕はその理由を考えようとして結局わからなかった。ともあれ、理由のない雪は降り積もる。境目のなくなった頭上からひらひら舞う。それがいつまでも続いて、僕は埋まれたらいいと思った。

ぺんぺん草の思い出

長谷川　至洋

それはある晴れた日の学校帰りのことだった。
僕は一人で、田んぼの中の一本道を歩いていた。
昨日に帰ろうか、地底に帰ろうか、そんな足取りで。
道ばたにはぺんぺん草がたくさん生えていた。
ぺんぺんぐさ。
その響きがとてものんきで、おだやかだから僕はぺんぺん草が好きだ。
結局、ぺんぺんぐさ、とつぶやきながら明日へと向かった。
あの日からずいぶんと時間が流れたが、ぺんぺん草はいまも僕にとってのんきさの象徴として、
変わらずに道ばたに生えているのである。
学校が終わり、午後のあたたかな日光の下で、予定といったら家に帰っておやつを食べながらルパンを見ることだけ。
そんな気分が、ぺんぺん草の思い出です。

あとがき

初めて目にする方も多いかと思いますが、小台と書いて「おだい」と読みます。odai magazineと書いてオダマガと読みます。この冊子は足立区小台にあるＢＲÜＣＫＥ（ブリュッケ）というコーヒー屋が発行しています。記事は店主やお客さん、知人などの方々に寄稿いただいて、できるだけ月刊で頑張って12号までやっていました。

今回は何ヶ月も空いてしまい、「えいっ」ということでリニューアル号として制作しました。今後も毎月は厳しいと思いますが、隔月くらいを目標に頑張りたいと思います。

記事は基本的にどなたでも寄稿できますので、寄稿してみたいという方がいらっしゃいましたら是非お寄せください。

今回は小台特集というわけではないですが、小台に関することが多くなる形になりましたが、リニューアルということもあり結果的に的を得たものになったのではないかと思います。

小台は荒川と隅田川に挟まれた地域で、足立区の南西の足立区と北区と荒川区が入り組んだあたりに位置しています。イントネーションは「古代」か「樹海」か定かではありません。

都電の停留所に小台がありますが、停留所の住所自体は荒川区西尾久です。

店の前の通りは都道４５８号白山小台線と言います。なぜ小台の名が入っているのか、今の小台を見れば謎ですが、その昔千住のさくら土手というのが江北橋のあたりまで続いていたそうで、とりわけ江北一帯は荒川の五色桜と呼ばれる桜の名所だったためなのかもしれません。小学生の頃に聞いた気がしないでもないのですが、１９１２年、日米友好のシンボルとしてワシントンに送られた３０００本の桜の苗木はこの江北の五色桜なのです。

寄稿や版組で制作にご協力いただいた皆さまにはお礼を申し上げます。

また、この小冊子を手に取られたハイセンスな皆さまに於かれましては、是非とも小台という町を訪れてみていただけたら幸いです。

小台マガジン Vol.13

2016 年 7 - 8 月
編集・印刷　ブリュッケ

BRÜCKE